

笠置皇居 かさぎのくわうきよ

〔元弘元年九月、後醍醐天皇笠置山に籠り給ふ所なり。弥勒石の上にあり。薬師石の傍らより登る、本丸二の丸と号て、南北に双ぶ。其間に溝の跡あり、北の方弥勒石の巔に至つて地形たいらかなり〕

増鏡云

後醍醐天皇笠置におはしましける頃、秋深くなりて、

うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山の紅葉をぞみる

主 上

太平記云

笠置の城と申は、山高ふして一片の白雲峯をうづみ、谷深ふして万仞の青巖道をさへぎる、つゞらなりなる道を廻りてあがる事十八町、岩を切て堀とし、石をたゝみて屏とせり。さればたとひ防ぎ戦ふ者なくとも、たやすくのぼる事を得がたし〕

陶山小見山夜討道 すやまこみやまようちのみち

〔笠置の後山なり。此所巖石峭壁として禽獸も翔がたく、麓には泉川めぐり青羅を帯るに似たり〕

太平記云

其夜は九月晦日の事なれば、目ざす共しらぬくらき夜に、雨風はげしく吹て面を向べきやうもなかりけるに、五十余人の者共太刀をせなかにをひ刃をうしろにさして、城の北に当りたる巖の数百丈そびへて鳥もかけりがたき所より上りける。二町ばかりはとかくして上りつ。其上に一段高き所あり、屏風を立たるごとくなる岩石かさなりて、古松枝をたれ蒼苔露なめらかなり。爰に至て人皆いかに共すべきやうなくして、遙に見上て立たりける所。陶山藤三岩の上をさらさらとはしり上て、件のさしなはを上なる木の枝に打かけて、岩の上よりおろしたるに、跡なる兵共おのゝくに是に取付て、第一の難所をやすくと皆のぼりてけり。(下略)

諺

曰

笠置かさぎの川上かみに飛鳥路あすかぢといふ村あり。此所の土民等どみんらす陶山小見山が案内者と成、後醍醐帝ごたいごていを苦しめける遺恨ゐこんに

より、今に至り笠置村かさぎと不和にして、柴薪しばたきの交易縁組などかたく禁じける。是其頃よりの風俗なりとぞ」

児瀧ちごたき

〔有市村ういちの川中にあり〕

稲竈いなかま

〔北大河原おほかほらの内川の中に巖あり、是をいふ。

大河原おほかほらは山城伊賀いがの国境なり、巽の方より南はやまとのくに大和国なり〕

補遺都名所図会朱雀之卷 終